

---

# 流れ ミ

ランデブー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流れ 星

### 【Zコード】

Z5818C

### 【作者名】 ランデブー

### 【あらすじ】

私は親友を傷付けた。流れ星を見たら、この胸の痛みはあるのかなあ？

慣れない車に揺られて連れてこられたのは、パパの田舎の……なんて所だったかな？ 忘れちゃった。

ここは歩いて五分以内にコンビ二なくて、携帯は圏外で、テレビのチャンネルは三つしかない田舎。でも都會と違い、騒めきはないから落ち着く。胸のあたりが痛くならない。

「みゆき 美幸、しんどくない？」

「ちよつと車酔いした。頭痛いー」

パパはあたふたしている、どうしようどうしようって。心配しきだよ、その気持ちは分かるけど私は大丈夫なんだから。車が苦手で酔つただけ。

「都會こは元気ないねー。ばあちゃんは今朝山登りしてきたんだよ」

緑色の飲み物が入ったコップを、おばんに乗せてやつてきたのはおばあちゃん。久しぶりに顔を見た、何だかシワが増えたような気がする。気のせいかな？

私は久しぶりだね、と言つた。おばあちゃんは優しく笑つて、私の頭をなでたりほっぺをさわつたり手を握つたりした。私は珍しい生き物なの？ 特別天然記念物なの？

「ああ、ダリー。お茶でも飲んでやつと寝よつ」

「里香りか子まで車酔いかよ」

「違う違う、私は一日酔い。昨日盛り上がりすぎた」

パパとママは笑った。ママは、笑つたあと口元を押されて苦しそう。パパは平氣。おばあちゃんの頭の上に、？が出ている。昨日の出来事教えてあげなくちゃ！

「昨日ね、懸賞に応募してたスワロフスキーのペンダントがきたの！ そんで超嬉しくなって、ママつたらボトルを何本も空けてさ」「座ろううスキー、スキーは立つてしないと危ないでしょう」

おばあちゃんは大きく口を開いて笑った。笑いたいのはこっちだよ、なんなの座ろううスキーって。超ウケる、面白い。だから私も大きく口を開いて笑う。

「美幸元気じゃないか、じゃあその特性ジューースは里香子が飲まないとな」「えつ」

美味しい空気を吸つたから頭痛いのなおつたのかな？ パパは緑色の特性ジューースをママに渡す。ママはにおいを嗅ぎしかめつ面。こんなの飲めない、と言つてパパに返した。おばあちゃんは悲しそうな表情をしている。

「ママ、おばあちゃんがせつかく作ってくれたんだから、ちゃんと飲まないとダメじゃない」

私は言つた、パパがいつも耳が痛くなる程言つている“勿体ないお化け”を思い出しながら。人間が食べ物を残したり捨てたりしたのを見た勿体ないお化けは、夜な夜な耳元で「勿体ない、勿体ない」って囁くんだ。だから、残したら夜な夜な……。

「苦そうだし嫌」

「つべじべじわざと飲むー」

ママは口をぽかんと開けている。パパは、私の頭を優しくなでる。おばあちゃんは、おかわりなら沢山あるからねーと言った。

「わかったわよ、飲めば良いんでしょ」

氣付いたらミンミンとセミ達は今畠中、ヤーいえば今年初めて聞いたな。私は外に出たくなかったから、ずっと家にいたし。あ、ママおかわりして。美味しいのかな?

ミ

「こは……公園?

「美幸は嘘つきだよ。田撃者ほこるんだよ、なのに向てて盗んでない」と言つて

田中君が見たんだよ、美幸が財布から千円取つてゐる

違つ、誤解だよ。私は田中君の親友なんだ、そんな事しない。

「絶交よ、泥棒と一緒にいたくない」

待つて、まだ話は終わってない。

キヤツ

「ゴメンなさい、私のせいで亞優が事故にあって。」  
あの時私が田中が犯人って言つたら良かつたんだ。」  
「ゴメンなさい。

三

私は目を覚ました。いつのまにか寝ていたらしい。外は真っ暗で、虫の声が聞こえてくる。癒される、あの夢を見たあとは不安になって自分をコントロールできなくなるから。

「起きたかな、うなされていたけど大丈夫？」

おばあちゃんは内輪をあおぎながら言つた。私は寒くないのに寒くて、しわしわのおばあちゃんの手を握る。あたたかい、落ち着く。涼しげな風鈴の音がリンと鳴り、風が部屋に入ってきた。

「もう怖くなじよ、ばあちゃんがそばにいるから」

鏡越しに見えた私の顔は、泣きつ面。涙を流していたんだ、鼻水も少し。ばあちゃんはティッシュで拭いてくれた、ちょっと痛い。

「生きていたらな、悲しい事や辛い事なんていへりでもある。泣きたかつたら泣けばええ、恥じやない」

そう言いながらおばあちゃんも泣いている。私はティッシュでふ

いてあげる、ちょっと力を入れて。

「ばあちゃんは、美幸がうまれた時の事を思い出して泣いた。オンギヤーって、小さい美幸は、精一杯泣いていた」

自然と涙が出た。ポロ、ポロ、両目から。

「小さな手で、人差し指をギュッと掴んだ。あんなに小さかつた美幸が、こんなに大きくなつた」

人つてあたたかい、今分かつたかもしれない。

あの事があつてから私は人を避けている。パパとママは私を抱き締めてくれるけど、ウザくていつも拒否している。また私のせいで誰かが傷付いたらと思うと、人と接するのは怖い。家族でも怖い。一人で解決しなくちゃ、コレは私の問題、つて縮こまつっていた。だけど困った時は大人に頼つて良いんだ、友達を頼つて良いんだ。

「美幸は、こんなに大きくなりました！」

私を信じよう、親友を信じよう。私は一人じゃない、心で繋がつている。

「そろそろ流れ星が見えるんじゃないかな」

キラキラ、夜空はお星様とお月様が輝いている。プラネタリウムより何百倍も綺麗きれい、こんなに素晴らしいものが見れるなんて私は幸

せ者だよ。

「どうだい美幸ちゃん？ 田舎の空は綺麗だろ？」

「うん、凄く綺麗。地球つて凄いな」

私はいつも、布団に包まっていた。体は悪くない、心に傷が付いてたんだ。

「元気な表情になつたな、パパは嬉しいぞ」

「今なら抱き締めてやっても良いよ」

パパ満面の笑み、ママもおばあちゃんも。

「ばあちゃんは願つておいや、じこさん天国でもモテますよつ」と

「……死んでないですよ、釣りに行つてるから」「ないだけですよ」

パパを抱き締めながら花壇のほつを見たら、ソコにはお尻をピカピカつて光らせている蛍がいた。

「ほたるはテレビでしか見た事ないよ~」

「私はテレビでもない」

「僕は見飽きた、子供の時いつも見たしね」

おばあちゃんは息子のアルバムを広げた。しかし、今日のメインイベントは流れ星だからアルバムは明日のメインイベントにする事に。おばあちゃんはほっぺたを膨らませた。

「美幸、空を見てみな」

お星様とお月様で十分綺麗だつたけど、夜空を流れる流れ星はもつと綺麗。

キラキラ、キラキラ、流れでは消える。一つの流れ星ではほんの少しあしか見れないけど、沢山の流れ星が途切れないので流れているからずーっと見れる。

田に焼き付けよつ、心のフィルムに焼き付けよつ。デジタルカメラで撮つたら感動が減つちやう。録画より、生の方が心に残る。

「夢みたい」

お願ひ事なんてしなくて大丈夫。仲直りして、今度は亞優ちゃんといこの流れ星を見よう。

「パパ、いっぱいの流れ星が空を流れてる。コレってなんて言つん

だつけ？」

「流星群だよ」

「りゅうせいぐん

」

とってもキレイ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5818c/>

---

流れ 三

2010年11月8日08時43分発行